宇都宮美香さん

私の初歩大阪適応記

作；朴コウン

私たちは、大阪に住もうと決心し、2011 年 9 月に大阪にやってきた。
2011 年は、日本において心の痛む出来事があったので、そんな時期に日本に行くというと家族みなの心配は並大抵ではなかった。もう永遠に会えないかのように泣いたが、私たちは心配に背を向けたまま旅立ち、すぐに日常を取り戻した。

その後、この地で知人にとても親切な大家さんを紹介してもらい、大阪の南の方に住まいを定め、定住の一歩を踏み出した。

エピソード 1
大家さんが、郵便物がきちんと届くように表札を出したらどうかというので、私たちは手作りの表札を出した。
ある日、夫と買い物に行き帰ってくると、おばあさんが二人、我が家の前に立って話しているのを聞いてしまった。
「ここ、朝鮮人が住んでるね」という…。
それから、私たちは大家さんに事情を話し、表札を外してしまった。
おばあさんたちの時間はどのあたりで止まっているのだろうか？

エピソード 2
運良くある会社に就職できた。
日本で、留学生時代に接客のアルバイトの経験しかない私には、事務所に座って電話で注文を受け、処理するのは容易ではなかった。
電話ごしに聞こえてくる単語を聞き逃さないために頭脳をフル回転しながら、毎日私は目のクマが顔じゅうに広がりそうなほどだった。
一度は、大阪弁がとてもきついおじさんが、いきなり「これ、なんぼや？」というのだ。
本で日本語を学んだ私が、方言がわかるはずがない…。生まれてこのかた見たことも聞いたこともない「なんぼや」とは一体全体何なのか？3 秒間の沈黙の後、私はおじさんに尋ね返した。
「なんぼやって何ですか？」

エピソード 3
初めての子どもが生まれて、やっとひとりでも子連れで外出する勇気が出てきたころ、私は乳母車を押して家の近所のスーパーへ向かった。スーパーの入り口にはマクドナルドがあるのだが、フライドポテトの匂いがいつも鼻を刺激した。
私は子どもがぐっすり眠っているのを確認し、注文したメニューを持って日当たりのよい近所の公園のベンチに席をとった。一人だけの時間を満喫しつつ、フライドポテトにひとくち食いつこうとしたその瞬間、誰かが話しかけた。急に背中に冷や汗をかいたようだった。
「恐れ多くも私の時間を妨害するお前は誰だ？」顔を上げてみると、にこにこと笑うセールスマンだった。
「あ〜、そうだ…。笑顔につばは吐けない…。」

「ニ・ホ・ン・ゴ・ワ・カ・リ・マ・セ・ン…。」とたどたどしく、やっと口を開く演技をした。
セールスマンのおじさんは、あわてて申し訳ないと謝罪したのち、別のターゲットを求めてあわただしくその場を去った。
「ふう〜、私の演技がうまくいったね。」ごめんなさい、おじさん、ふふ…。

私の大阪生活は、今年で 15 年目。いまだに適応中だけれど、明日が期待できる楽しい今日を生きながら、いつもこのすべてのことに感謝を忘れぬよう、私自身と約束してみる。